

里山整備に若い力を～全校マツタケ山づくりプロジェクト～

岩手県立大野高等学校 2年 ○下川原 奈々子
浜川 美穂

1 はじめに

人間が長い時間をかけて育て守ってきた自然と人々の生活がよく調和した美しい風景、これが里山の風景です。洋野町大野では、この豊かな森や自然を村人が時間をかけて切り開き維持してきました。しかし、里山の荒廃は進んでおり、若い世代の私達はこの自然の恵みを十分に体験していない状況にあります。

昭和30年代までの炭焼きが盛んな時代には里山は完全に整備され、一木一草に至るまで人々の暮らしに活用されてきました。そうした山の斜面には、至る所でキノコの王様であるマツタケが発生していました。

大野高校は、こうした自然環境の復活や保全を環境教育と捉え、全校生徒によるマツタケ山整備事業を実施しています。

2 研究方法

(1) 実態研究

キノコは大きく2種類に分けることができます。死んだ木につき、栄養を一方向的に吸収する「腐生菌」と、生きた木につき、互いに栄養などのやり取りをする「菌根菌」の2つです。マツタケは後者の菌根菌で、生きたアカマツなどの細くて若い根につき栄養をもらいます。逆に、アカマツは、マツタケからリンや窒素などのミネラル類を受け取って、土壌中の微生物から守ってもらいます。また、マツタケが感染した根は、多くの根を出し、成長が良くなります。つまり、マツタケとアカマツは共生関係にあるのです。

マツタケが育つ複雑な条件にはいくつかありますが、まず第一に樹齢30年～70年のアカマツがあること。それから水はけ、風通し、日当たりが良い場所であること。そして、落ち葉や枯れ枝が積もっていない、一見掃除でもしたかのような綺麗な環境であること。落ち葉や枯れ枝が多いと他のキノコやカビなどが増え、弱いマツタケは競争に負けてしまうのです。

(2) 活動内容（里山整備）

学校の北方約1.5kmに位置する久慈平岳（標高706.3m）の山麓に広がる約1haの里山を地元の方から借り受けて整備を進めています。1年間の主な取組は、4月下旬から5月上旬に事前整備、5月～7月にかけて学年整備、そして9月下旬から10月上旬に

マツタケが発生する条件

- ・ 西側の斜面
- ・ 手入れの行き届いたアカマツ林
- ・ 雑木を刈り払う
- ・ 風通しを良くする
- ・ 厚く積もった腐葉土を取り除く
- ・ 里山の手入れにより生物の多様性を守る

全校収穫祭を実施し、今年で5年目を迎えました。マツタケを育てるには適度に枝打ちをし、落ち葉を撤去する必要があります。マツタケ生態学者吉村文彦博士や久慈地方森林組合の方々から助言・指導をいただきながら、低木の刈り払い、落ち葉と腐葉土の除去によってマツタケ発生の環境を整えています。

平成 21 年度活動日程

名 称	実 施 月 日	活 動 場 所	参 加 対 象	参加人数
事前整備	4月24日	久慈平岳	職員・地域住民	4名
全校研修会	5月27日	本校体育館	生徒・職員	220名
学年里山整備	5月14日	久慈平岳	2学年	59名
	6月26日		1学年	79名
	7月3日		3学年	63名
講演会	10月5日	本校体育館	生徒・職員・一般	250名
収穫祭	10月6日	久慈平岳 本校校庭	生徒・職員 PTA・地域住民	250名

事前整備では、教職員と森林組合の方など10名程度で山に入り、チェーンソーなどで余分な木を伐り倒しておきます。そして、学年整備では、生徒たちが中心になって伐り倒された木を運んだり、林床の落ち葉や腐葉土を取り除いたりする整備作業に取り組みます。

学年整備には、各学年（各2学級）の生徒と教職員が全員参加し、2時間連続の授業を利用してバスで久慈平岳に出かけ（片道約20分）、学年毎に場所を決めて整備作業に取り組みます。また、PTAにも案内を出しており、数名の父兄も参加している。

学年整備終了後は、マツタケの発生を待つばかりですが、収穫祭前には山の見回りも行っています。



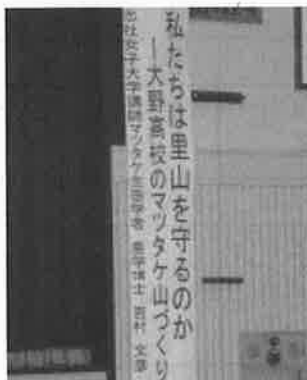
(3) 講演会

全校収穫祭前日には、吉村文彦先生（前：岩泉マツタケ研究所所長、同志社女子大学講師マツタケ生態学者、農学博士）を招いて、マツタケの生態や里山整備の意義などについて講演を開催している。

（吉村先生は翌日の収穫祭にも参加）

参加者は全校生徒・教職員のほか、森林組合の方や PTA、学校評議員、大野高校を守る会の方々などにも広がっている。この講演会は、プロジェクト準備段階の平成 16 年から開催しています。

吉村先生講演会



講演会後の生徒アンケート（抜粋）

- 吉村先生のマツタケに注ぐ愛情が、とてもよく伝わりました。自分たちが作ったマツタケに多くの人たちが関心を寄せてくれていることに驚きました。
- 明日は、少しでも多く収穫したいと思います。
- 私たちの活動に多くの人たちが協力してくれているので、ムダにしないような収穫祭にしたいです。
- 今年はマツタケの収穫はあまり期待できないようだが、吉村先生のマツタケへの情熱から頑張ってマツタケを見つけようと思った。

(4) 全校収穫祭

収穫祭当日は、太鼓の音を合図にして、全員が山に入り、思い思いにマツタケを探して回ります。収穫祭の成果は平成 17 年は豊作で 25 本、2 年目以降は 5 本、19 本、4 本、4 本と推移しています。発見することができる生徒は数人ですが、見つけた生徒たちは満面の笑みで喜び合います。

発見の瞬間



山での収穫を終えると、学校に帰ってマツタケご飯や炭火焼きなどにしてみんなでいただきます。今年度は、PTAの全面協力で事前に集められたマツタケでマツタケご飯を作っていただきました。PTAをはじめ地域も一体となった収穫祭となっています。

収穫祭



3 結果及び考察

大野ではその広大な林野を生かし、木炭や木工産業が行われています。岩手県はマツタケの宿主であるアカマツ林生息の面積が日本一とも言われ、ここ大野にも多くのアカマツ林が存在しています。かつての先人たちは里山を整備して、その恩恵としてマツタケを収穫してきました。里山整備事業を通じて、そうした山の財産が私たちの身近にあることを実感し、環境保全や郷土愛の意識を強く持つことができました。

本年は、不作で4本の収穫に留まりましたが、過去には10本を越える収穫があり、一定の成果が得られてきていると確信しています。マツタケの発生は、その年の天候に大きく左右されますが、今後も里山整備を継続して、その恩恵を受けられることを信じて事業を進めていきます。

マツタケは、その環境が整えば同心円状に発生を拡大していきます。助言を頂いている吉村博士からは、発生場所の周辺を重点的に整備するよう指導をいただいています。今後は、これまでの経験を活かして整備範囲を拡大していこうとも考えています。

その年によって不作や収穫最適時期の変化もあり、収穫が安定することはありません。ただし、マツタケの収穫はあくまでも恩恵であり、本来の目的は「里山再生」「里山づくり」です。里山整備作業を通じ、地域住民をはじめ多くの方々との協働から得られるものは意義深いことですし、改めて里山の持つ多様な環境保全機能とその里山を守ってきた先人の英知に気付くことができました。